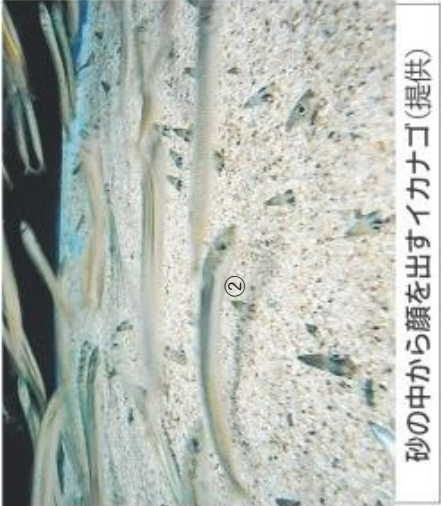


シンコ漁 過去2番目の低水準



砂の中から顔を出すイカナゴ(提供)

水温上昇、栄養不足が原因

今春のイカナゴのシンコ(稚魚)漁は、大阪湾で昨年に続いて休み、実施した播磨灘も3日で終えた。

兵庫県のイカナゴの漁獲量が2025年は63トン(県速報値)と、統計が残る1956年以降で2番目に少なかったことが県のまとめで分かった。海の水温が上がり、^①栄養も減り、^②天敵も増える。イカナゴにとってすみにくくなった「三重苦」とも言える状況が原因とみられる。休漁や漁期の短縮に加え、さまざまな策がとられるものの、資源量の回復には至っていない。

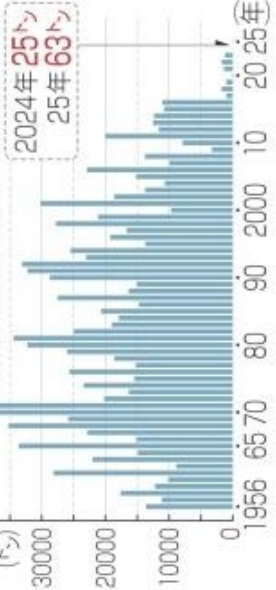
25年、県内漁獲量63トン

③ イカナゴ スズキの仲間。成魚(フルセ)は約15センチ。生後1年目の冬から産卵し、寿命は3、4年。兵庫県の瀬戸内海では2月末～3月初旬にシンコ稚魚漁が行われ、くぎ煮が郷土料理となっている。刺し身でも食べられるフルセの漁は自粛が続く。世界中に分布し、日本沿岸では特に北海道と瀬戸内海に多いが、漁獲量は全国で減少傾向。愛知・三重県の伊勢・三河湾では2025年までに10年続けて禁漁となっている。

かつての漁獲量は3万トンを超え、養殖魚の餌にも使われたが、**■**年以降は千トン以下に低迷。24年は過去最少の25トンにまで落ち込んだ。25年は前年の2・5倍になったが、操業日数が増

■ 兵庫県内のイカナゴ漁獲量の推移

※兵庫県と農林水産省の資料から作成



えたことが理由だ。イカナゴは暑さに弱く、6月下旬から砂の中で半年近く「夏眠」する。気象庁の観測によると、日本近海の水温は22年までの100年間に約1・2度上昇。県水産技術センター(明石市)が観測する播磨灘では、22年までの50年間で約1・5度上がっており、水温が生態に合わなくなっている可能性がある。一方で、イカナゴを食べるハマチやサワウらは高温を好むため増えており、生息環境は厳しさを増す。

海の栄養となる窒素は50年前の半分以上に低下。県や漁業者らは、下水処理場から流す量を増やし、海底の養分をかきだすなどの対策を続けるが、濃度に大きな変化は見られていない。

センターの西川哲也上席研究員(58)は「栄養ではさまざまな手を打っているが、水温は地球規模の問題でさらに難しい」と説明。今後に向けて「漁を1、2年休み、資源量の変化を見てはどうか」と提案している。(長尾亮太)

上の記事を読んで、下の問いに答えましょう。

1 傍線部①「栄養」とは何のことですか。漢字2字で本文中から抜き出しましょう。

2 傍線部②「天敵」を本文中から2つ抜き出しましょう。

3 傍線部③3万トン以上とれた年は何年ありましたか。グラフから読み取りましょう。

4 空欄に入る年を書きましょう。

5 イカナゴの漁獲量を増やすために行っている具体的な対策を、本文中から2つ抜き出しましょう。1つは8文字、もう1つは25字で最初と最後の3文字を書きましょう。

年

～

NIEワークシートのこたえ（2025年5月28日公開）

◆ワークシート「イカナゴが獲れない(理科)」 2025.5.28付 朝刊 22面 解答

- 1 窒素
- 2 ハマチ サワラ (順不同)
- 3 9 年
- 4 17 (2017)
- 5 休漁や漁期の短縮 下水処 ～ きだす